

心手雙暢

星 弘道

Kodo Hoshi

この作は、「姚合」の五言二句を書いたものだが、一字一字の存在感と全体の対聯としての纏まりを意識して書いた。

筆と墨と紙の調和が難しく、様々な紙を使っても見たが、この作が一番良かったようです。

特に「削」の縦画の起筆、送筆、収筆が楽に書け、自然な運筆の中に微妙な呼吸が出たことが成功に繋がったことと認識しています。

作品は、作ろうとするとわざとらしくなってしまう、なかなか自分の思うようにいかないものですが、書いていく中に何かひとつの閃きとか、良い造形、思いがけない線などが出ると全体が変わってきます。

自分は、閃き方なので、特に書いていく中に種々出てきます。

これも、日頃の臨書、創作の習練がなかったなら出てくる訳もないので、常に種々自分に合ったものを書いていることが大切なのでしょう。

線の緩急、肥瘦。抱懐、筆圧の変化等を自在に顕すには、道具として巧みに筆を使うことが出来ないと、表現したいものが書けないと思います。

書譜に「智巧、兼ね優れ、心手、双つながら暢び、翰、虚しく動かず」は、まさにこのことであろう。

これを自分の戒めとして、日々精進を心掛けています。



酒熟聽琴酌 詩成削樹題

136 × 29cm × 2幅